



「神山荘」佐藤施設長

楽しいと思える生活を送れる施設にしたいじゃないですか。私だっけいずれはこの施設のお世話になるのかもしれないのですから。限られた予算ではないですが、その枠内でできる限り良質のサービスを提供できるように、日々のろんなアイデアを巡らせていますよ」と、熱っぽい口調で話してくださいました。

また昨年、ボランティアのかたちや短大生の協力を得て、ホーム内に「茶房カミヤマ」を開設したところ、好きなときに自由にお茶を楽しみながら昔話に花を咲かせたり、ボランティアのかたたちの顔ぶれを楽しんだりして、入所者の皆さんがとても生き生きしてきたとのことでした。

実際にこのホームの和やかさと活気を十分に感じとれた一日でした。短大生のサービスマンともさわやかでほほえましく感じられました。家庭でもなかなかできないことまで率先して取り組んでいる施設長さんと職員の間には、感銘すら覚えました。

3・大館園

どこまで行っても
わが部屋へ帰れる

平成五年一月に医療法人「光智会」によって開設された老人保健施設です。芦田子の広い田園風景の中に建つ、白い二階建ての建物で、入所定員は一般棟百人、痴ほう専門棟五十人だそうです。医師による医学的な管理のもとで、介護を必要とするお年寄りの医療ケアと日常サービスをを行い、自立を支援し家庭への復帰を目指すという、家庭と病院の中間的役割を果たす施設です。



医療法人「光智会」池田理事長

今回は、大館にただ一つという痴ほう専門棟を見学させていただきました。ここは、寝たきりの状態ではないが痴ほうの状態が著しく、家庭での介護が困難な対象で、一部屋に四人ずつが生活していました。痴ほう性のお年寄りに配慮した設計がなされた建

物は採光も良く、また広い廊下は迷っても必ず自分の部屋へと戻れるよう周回状の造りになっており、さすが、と思わされるものがありました。ベッドに寝ているかたも二人ほど居られましたが、あのかたはそれぞれ自由にテレビを見たりおしゃべりをしたりしていました。

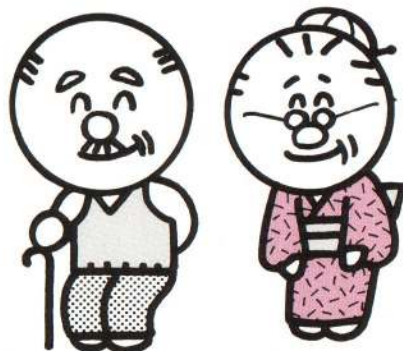
ここだけはまだ少し入所定員に余裕があるようでした。また、家庭でお年寄りの介護をされている場合、旅行や病氣などやむを得ない事情で介護ができなくなったときに、十四日を限度として利用できるショートステイや、時間を限定したデイケア、ナイトケアなどの利用もできます。家庭での介護の悩みをひとりで抱え込んでいないで、このようなところに相談してみるといいかがでしょうか。

サービスの手を 差し伸べよう

今回訪問した三つの施設とも、それぞれの特性を活かしながら、入所者が楽しく生きがいある生活ができるよう創意工夫がなされ、意欲的に取り組んでいることが分かりました。財政的な不安や人員不足を抱えながら、一人ひとりの入所者の希望をできるだけ活かしたいと努力している職員の皆さんには、頭が下がる思いでした。

急速に進む高齢化社会の中で施設の利用希望者も増え、市内では現在、特別養護老人ホームで百四十人、養護老人ホームで四十人ほどのかたが入所待ちの状態にあるとのこと。この状

況は今後しばらく続くものと思われる。施設内でも入所者の高齢化が進んでおり、医療・保健・福祉の総合的な連携の必要性は、より一層高くなることでしょう。施設の増設が望まれるのももちろんですが、介護を必要とするかたのすべてを公的な施設で受け入れることは、費用の面からも人的な面からも限界があるものと思われ、安易に「後は施設に世話になればいい」というわけにはいかない気がします。在宅介護の拡充を図ることがどうしても必要と思われる。



在宅で公的なサービスや民間のサービスを効率よく活用しながら人間らしく生きて終末を迎えるという選択肢もあります。そのためにはまずホームヘルパーの増員や地域住民の協力が不可欠です。「サービスを受ける前にまずサービスの手を差し伸べよう。自分ができる間は積極的に福祉活動に参加し、できなくなったときは援助してもらおう」という気持ちが大切である、と改めて感じました。